題しらず

よみ人しらず

むばたまのやみのうつつはさだかなる夢にいくらもまさらざり

瀬

樹

良

基

がある。この本歌の解釈について『古今和歌集遠鏡』は、「開イ ノニチヨツト塗タノハホンマノ事デモ タシカナ夢ニ何ホドモマ

と物語類は『日本古典文学全集』によった。 の特色を考察しようと思う。 なお、文中に引用した和歌は、『新編国歌大観』に、『万葉集』

けられ、小町を初めとしてあまたの歌人に取り上げられてきた。

平安朝に入ると『古今和歌六帖』には「ゆめ」という題も設 雑の部に一首の計五首見られる。夢は『万葉集』に多く詠ま **【忠度集】には、夢を詠んだ歌が、春の部に一首、**

恋の部に三

けり (恋歌三、好)

ここでは特に、忠度の夢の歌に焦点を当てながら、その美意識

し、『古今和歌集新釈』は、「忍びてあふに人の見やせんとてか サツタ事はナイワイ「夢ニ見タト同シクラヰノ事デアツタ」と訳

たへにともし火もえたかぬを「やみのうつゝ」とはいへるになん。

とであったよ。」と解釈している。

この本歌は、「やみのうつつ」と「さだかなる夢」とを対比し

で相逢った現実は、はっきりと見る夢に、いくらもまさらないこ といへる意にぞ。」と述べ、『古今和歌集評釈』 は、『夜の闇の中 かゝるはさだかに顔見る夢とくらべ思ふに何ほどのまさりもなし。

夜思梅花といふ心を、人人よみ侍りしに

が問題になる。普通、夢は「うつつ」と対比される。池見澄隆氏 あるよと述べている。ここでは、「闇のうつつ」をどう解するか ていて、前省は後者より幾分まさっているもののはかないことで

(『忠度集』春、9)

梅のはなよるは夢にも見てしかなやみのうつつはにほひばかりぞ

この歌の本歌としては、「古今集」に、

は、古代・中世人の夢信仰に関して、『往生要集』の『金剛経』

象世界に実在性を認めないこと=現実否定の論理を、心理現象とまた。皆「如し」応にかくの如く観をなすべし」について、「現を引用した「一切の有為法は「夢・幻・泡・影の如し」露の如く

り、たいのでは、ことのようのでは、「である」とあり、平安朝夏の夜の晩がたの別なりけり」(夏、壬生忠岑)とあり、平安朝べられている。また『後撰集』の歌に、「夢よりもはかなき物は

現象としての夢を『非実在』の典型とみている点である。」と述

しての夢の比喩にかりたのであるが、ここに注意すべきは、心理

う 説を引いて、「古代的観想の最も根源的な部分において、闇と(モ゚。) と同の幻想領域であ」って、「「夢」も同様のものであった」といは、三浦祐之氏の「闇が神の示現の空間の基本的条件であり、人の人々にとって夢ははかないものとされていた。さらに森朝男氏の人々にとって夢ははかないものとされていた。

とは、「夢に見る世界とは別の、はかない夜の現実の世界」を意常の世界を表す点で結びついている。従って、「やみのうつつ」つつ」と「さだかなる夢」とは、共にはかないものであり、非日夢とが同類の概念であった」と される。そうすると、「やみのう

している。

らめし(『綻後撰集』恋歌四、真昭法師)

まよひこしやみのうつつのなごりとて見ゆとは見えぬゆめもう

味していることになる。

「やみのうつつ」という語は、勅撰集では、『古今集』の上掲

この歌語の意味を状況に即して捕らえるためにこの語にかかる「風雅集」一例が使用されている。「風雅集」一例が使用されている。の歌の他に、『新勅撰集』三例、『続後撰集』二例、『続古今集』の歌の他に、『新勅撰集』三

- 見るとなきやみのうつつにあくがれてうちぬるなかのゆめやた修飾語を調べてみると、次のようになる。

えなむ(【新勅撰集】恋歌三、前関白)

るとなきやみの現とは、くらき所にて逢みし夜のはかなき名残をみ給ふなるへし」と解説している。また『新勅撰集抄』は、「みて現在に逢みる事也。……うちぬる中の夢とは其人にあふ事をよ『新勅撰集口実』はこの歌について、「闇の現とはくらき所に

つつ」を夜暗い所で会ったことの意味にとっている。結局、この夢にみる事も絶果なんと也」と説明している。共に、「やみのういへり。其名残をしたひて心あくかれてぬるよもやすからねは、るとなきやみの現とは、くらき所にて途みし夜のはかなき名残を

着かないので、夢の中で相手に会えなくなるのではないかと心配い昨夜の逢瀬を名残惜しく思うあまり、それに心が引かれて落ち頼りない昨夜の逢瀬を指していることになる。この歌は、はかな語は比喩として使われているので、会ったという実感の湧かないこと、『春春』に見て会」だことの意思をとってしる。 希見 この

る。ので、夢の中であの人に会おうにも会えないことを残念がっていので、夢の中であの人に会おうにも会えないことを残念がっていると探し当てて会った昨夜のはかない逢瀬を名残惜しく思っているこの歌は、あの人に会おうと思って闇の中で迷い迷いしてやっ

つかのまのやみのうつつもまだしらぬ夢より夢にまよひぬるか

2 -

な(『式子内親王集』、恋

親王集」は、「ほんの瞬間の闇の中の現実」と訳している。ここ

この歌の「やみのうつつ」について『日本古典文学大系式子内

伸を経験したこともなく、ただ一途に夢の中だけであの人に会う もはかない遙瀬の比喩として用いられており、そのような男女の

ことを求め続けている切ない恋心が歌われている。

色わかぬやみのうつつのひとことに袖の千しほはいとどそめつ

つ(「拾遺恩草」、権大納言家三十首)

ない昨夜のあの人との逢瀬で聞いたあの人の一言が私を悲しい気 この歌は、「色わかぬ」と「干しほ」を対比させながら、 はか

以上のように、恋歌に用いられた「やみのうつつ」は、『古今

持ちにさせ、私の流す涙で杣の紅色を一層色濃くさせたと言って

窓を表している。 集』の本歌によりながら比喩的に使われ、はかない昨夜の遙瀬の

世界を象徴するものであった。

次に、四季の部に詠まれた「やみのうつつ」の例をあげてみよ

鳥羽玉のやみのうつつのうかひ舟月のさかりや夢もみるべき

この歌は、月光の皎々と照らす夜は鵜飼舟の辮火も効果がない (「壬二火」、夏

かと推測している。 ので、鵜飼達は舟を出さずに寝込んで夢でも見ているのではない

思さるるにも、

闇の現にはなほ劣りけり。」と述べている。命婦

い宿命を見つめている。 を犯す意を掛け、無常のこの世を罪を背負って渡る鵜飼い舟の暗 この歌は、「闇のうつつ」に、夏の深い闇夜と鵜飼いの殺生戒

いつまでと闇のうつつの鵜かひ舟夢にまさらぬ世を渡るらん

(「宗良親王千首」、夏百首)

郭公やみのうつつの一こゑはおもひもわかぬうたたねのゆめ (「正治初度百首」、夏、権大納言忠良)

は郭公の声を夢うつつに聞いている。 この歌の「やみのうつつ」は暗黒の夜の闇の世界を表し、

影響下にあるとはいうものの、「やみのうつつ」の持つ销趣は開 対比させながら用いられ、夢に見る世界とは異なる夜の情趣的な の持つそれと共通している。 以上のように、「やみのうつつ」という語は、一首の中で夢と 以上の三首の歌は、夢と「やみのうつつ」を対照させる本歌の

死後帝は母君の許へ靱負命婦を遣わすが、その時の帝の亡き更衣 る。『源氏物語』では、桐壺の巻に一例にみられる。

まひしに、心ことなる物の音を搔き鳴らし、 る言の薬も、人よりことなりしけはひ容貌の、面影につと添ひて を偲ぶ様子を、作者は、「かうやうのをりは、 はかなく聞こえ出づ

一方、この「やみのうつつ」という語は物語にも用いられて 御遊などせさせた 桐壺更次の

が出発するのは月の美しい宵だったが、帝はこのような時には管 弦の遊びをなさるのが常であった。丁度その時、帝はふと更衣の 姿、容貌が幻となって自分の傍らに座っているように感じる。 「闇の現」は、ここでは闇の中でぼんやりと見える更衣の姿や容 ら梅花の色の美しさを賛美する「万葉」的な常識を打破している。 明らかになるところに生じる周囲の人々のとまどいをユーモラス 姿を隠そうとはするものの匂いによってその人の紛れもない姿が この本歌の「やみはあやなし」を引き歌として、

間がその人の

貌を表している。「さだかなる夢」と同じく、現実の姿ではない

うつつ」が対比されている。この歌の意味は、梅の花は夜は夢の 幻影よりも不明確でも生身の姿に会えるほうがよいと言っている。 ところで、冒頭にあげた『忠度集』9番の歌も、夢と「やみの なごりまでとまれる御匂ひ、「悧はあやなし」と独りごたる。 (岩菜上)

に描いたのが『源氏物語』であった。

中で見たいものだ、闇の中では花の色は見えず匂いしか感じられ ないというもので、「やみのうつつ」は闇の中にぼんやりと見え 深い中をそそくさと紫上の所へ帰っていく。その後まで残ってい る源氏の衣に焚き染めた香の匂いに、女三の宮付きの女房達は男 女三の宮との新婚三日目の夜、夢の中に紫上が現れた源氏は夜

の香りはやがて夜の「暗香」へと及んでいったされ、「この暗が になると梅の花の色も香りも盛んに詠まれるようになり、梅の花 のが多く、梅の花の香りを詠んだ歌は一例しかないが、『古今集』 小島憲之氏は、『万葉集』では梅の花の色の美しさを歌ったも 君のいない遺る瀬なさを募らせる。 はつかにのぞく女房なども、「闇はあやなく心もとなきほどな 人はみな花に心をうつすらむひとりぞまどふ狝の夜の間 れど、香にこそげに似たるものなかりけれ」とめであへり。 竹竹

4

る梅の花を装している。

こえし」などすかして(〃) 「闇はあやなきを、月映えはいますこし心ことなりとさだめき

雪のやうやう積もるが星の光におぼおぼしきを、「悧はあやな 大将、人にもののたまはむとて、すこし端近く出でたまへるに、 し」とおぼゆる匂ひありさまにて(浮舟)

梅の花の色は隠しても香りは隠さないと言って、機知を弄しなが 初めから順に、六条院の女房、蔵人少将、 女房、 作者が、 春の

を本歌としている。この本歌は春の夜の闇を擬人化して、それが

答の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えねかやはかくるる

はるのよ梅花をよめる

れている。この忠度の歌の下句は、『古今集』春歌上の、

りの芳香の歌の出現は、特に唐詩のそれの認識による」と説明さ

(「忠度集」恋、64)

「親宗集」によって法

もない、薫の体の芳香の魅力を語っている。

寒げに、大殿油も消えつつ、捌はあやなきたどたどしさなれど夜になりてはげしう吹き出づる風のけしき、まだ冬めきていと

(早縣)

結局、躬恒の「やみはあやなし」の歌は、『大漢和辞典』 などかるということを作者が説明している。

闇香随∠風軽」にみられるような「暗香浮動」の世界を取り上げがあげる『白氏文集』の「答□桐花」詩」の句『夜色向∠月浅、#=>

夢」と「やみのうつつ」を対比する手法を取り入れながら、下句・忠度の「梅の花」の歌は、『古今楽』昭番の歌の「さだかなるて、趣向を凝らしている。

ジを視覚的に捉えることを重視する傾向がうかがえる。の花を夢に見たいと詠んでいるところに、梅の花の美しいイメーに躬恒の歌の影響を受けている。そして、闇の中の香りよりも梅夢」と「やみのうつつ」を対比する手法を取り入れながら、下句

Ξ

こひわたるいもがすみかは思ひねの夢路にさへぞはるけかりけ

年に催されたものとされている。住寺殿供花会の作と推定」され、犬井蔣蕣氏はこの会を承安元住寺殿供花会の作と推定」され、犬井蔣蕣氏はこの会を承安元

森本元子氏は、この歌を「『頼政集』や

あって歩に苦がつけて氷まれ、「思りぬりが格」で、『弓回修』で夢なればわが心から見つるなりけり」(恋歌二、凡河内躬恒)と「思ひね」という語は、『古今集』に、「君をのみ思ひねにねし

洋一氏は、「『古今集』で五例、『後撰集』で八例と数多くよまれるらむ』と歌われてる。なお、「夢路」という歌語について片桐「ころもでぞけさはぬれたるおもひねのゆめぢにさへやあめはふあって夢と結びつけて詠まれ、「思ひねの夢路」も、『躬恒集』に、

遺恐草員外』に一例ずつ出てくるだけで、他は「思ひねの夢」の集』、「新千戒集」に一例ずつ使われ、私家染でも『重家染』、『結治遺でいる。「思ひねの夢路』も、勅撰集では『続古今集』、『続拾遺に三例あるほかはほんとど用いられなくなっていったと述べられに三例あるほかはほんとど用いられなくなっていったと述べられたが、その後は急に減少して」、『拾遺集』以下では『新古今集』

5

この忠慶の歌は、自分が恋人の所へ通っていく通路が夢の中に形で多用されている。

も遠いと言って、恋人が自分の思いどおりに夢に現われてくれなで容易に会えないほど遠いばかりか、思い寝の夢路においてまでな恋の情趣的世界に立ちながら、自分の恋人の住居が現実の世界存在するという俗信を背景にした『古今集』、『後撰集』の伝統的

いもどかしさを訴えている。

る

287

寄源氏恋

かぜあふとみる夢さめぬればつらきかなたびねのとこにかよふまつ

この歌は『源氏物語』の明石の巻の情景を踏まえている。須磨(『忠度集』恋、76)

と打ち明けられる。源氏が入道の邸で琴を弾くと、その音色がぎ心も安まる。そうした時に、源氏は入道から娘を貰ってほしい謫居後、入道の勧めによって明石に移った源氏は、新居に落ち着

「旅ごろもうらがなしさにあかしかね草の枕は夢もむすばず」と向かって、あなたは一人疫の辛さを知ったかと尋ねる。源氏は、「松の響き波の音」と一緒になって聞こえてくる。入道は源氏に

疫はもの恐ろしき心地すべきを一と言って女気を離れた旅疫の恐ある。この旅寝について、『源氏物語』では、源氏が「女遠き旅答える。旅寝の悲しみのために夜も眠れず夢も見ないというので

ば」(若紫)と作者が説明を加えたりしている所があって、旅疫怖を語ったり(帚木)、「(源氏は)かかる旅寝もならひたまはね寝はもの恐ろしき心地すべきを」と言って女気を離れた旅疫の恐

めてしまうことを嘆いている。源氏が入道の娘に引かれ始めてい夢を見るが、旅寝の床に吹いてくる松風の音によってその夢が覚この忠度の歌は、源氏が紫上を思いやりながら寝て彼女に会うに新鮮な印象を見出している。

表現もみられる。勅撰集では、 なお、夢は本来見るものであるが、夢が覚めることを重視する る時だけに一層、

紫上に「あふとみる夢」は結ばれないのである。

みれ(『金葉集』二度本雑部下、選予内親王)

ましばふくやどのあられに夢さめて明がたの月をみるかな

かりのくる伏見の小田に夢さめてねぬよのいほに月をみるかな(『千歳集』雑歌上、大江公景)

(『新古今集』秋歌上、慈円)

(『新古今集』 秋歌下、式子内親王) ちたびうつきぬたのおとに夢さめて物おもふ袖の露ぞくだくる

まつふくかぜにゆめさめて恋しさまさる冬の山ざと」(「雅楽集」)忠俊の歌の松風の音によって夢が覚めることは、「おもひやれ

に先例がある。

かみられる。 そして、『源氏物語』にも「夢が覚める」ことの描写がいくつ

た源氏は、八月十三夜に入道の娘の許を訪ねて歌を詠み合う。源に夢さめて涙もよほす滝の音かな」と詠む(若紫)。明石に移っろす風に乗って聞こえてきたので、源氏は「吹き迷ふ深山おろし交わす。明け方、法華三味をお勤めする愧法の声が山から吹き下源氏は北山でのぞき見をした僧房の僧都と対座して、歌を詠み

氏は、「むつごとを語りあはせん人もがなうき世の夢もなかばさ

- 、メイトドレ メームー 曵子でも青っしたハヒ床える(月石)。 夕景ま並引こむやと」と歌って、娘と睦まじく語り合い、憂き世の恶夢のよう

紙を宮に書く。「いつとかはおどろかすべき明けぬ夜の夢さめて迫る自分を受け入れようとしない落葉宮の心を解きほぐそうと手、な悲しさを幾分でも晴らしたいと訴える(明石)。夕霧は強引に

られていたことを悪夢のように思い出している様子を、作者はとか言ひしひとこと」(夕霧)。また、浮舟がさっきまで匂宮に迫

「恐ろしき夢のさめたる心地して」と説明している(東屋)。

り、また「夕霧」の巻の夕霧の歌の「夢さめて」の夢も無明長夜「若紫」の巻の源氏の歌の「夢さめて」の夢は煩悩をさしてお

合の夢は煩悩や悪夢をさすことが多い。の煩悩を意味している。【源氏物語】で「夢が覚める」という場

「つらきかな」と言って否定的にみている。夢が覚めることで、的に受け入れる場合が多いが、この忠度の歌は夢が覚めることはこのように、勅撰集や【源氏物語】では夢が覚めることを肯定

夢の中での途瀬喪失への強い嘆きが歌われている。

五

5

夢中会恋

この歌は『月詣和歌集』にもとられており、「さめて後夢なり歌さめてなごりにたへずなりゆけばあふとみつるにかへん命か

けりと思ふにもあふはなごりの惜しくやはあらぬ」(恋下、内大

臣)の歌がその次に載せられている。

たと見たことが私の命以上に大切に思われるというもので、恋人名残惜しさに堪え切れなくなってゆくので、夢の中で恋人に会っ忠度の歌の意味は、うっとりとした幸福な遙瀬の夢から覚めて

この歌は『古今集』の、...

に会う夢を見た時の異常に髙揚した気分が余情となっていつまで

覚めた逢瀬の夢は命以上に惜しく思われるという気持ちに対して、を本歌としており、この本歌の最後まで見終わらないで途中で目

7

けり(恋歌二、壬生忠岑)

いのちにもまさりてをしくある物は見はてぬゆめのさむるなり

恋死と夢の中での遙漸を結びつけて詠んだ歌は、『万葉集』に遙漸の夢から覚めた後の余情のほうを重視している。

現 には逢ふよしもなし夢にだに間なく見え君恋に死ぬべし

(巻十一、よみ人しらず)

忠度の歌のような恋に殉じようとする生命の燃焼はみられない。とあり、これは途瀬よりも自分の生命を重視したもので、忠岑や

を詠んだ歌は、平安時代に入ってもいくつかみられる。一夢と結びつけて命と引き換えに途瀬を持ちたいという一途な恋!!

(『見たずり) ねぬる夜の夢さわがしくみえつるはあふに命をかへやしつらむ

(「和泉式部集」)

あふと見てうつつのかひはなけれどもはかなきゆめぞいのちな

あふとみし一夜の夢の別よりしらぬ命のをしくもあるかな りける(「顕輔集」)

また、「夢のなごり」という逢瀬の恍惚とした気分を余情とし (【壬二集】、恋部)

から、多く詠まれるようになっていく。 ねざめかなはかなき夢のなごりばかりに」(恋歌五、寂蓮)の歌

て表す語も、刺撰集では『新古今集』の「涙がは身もうきぬべき

このような詞書を持つ歌としては、 なお、忠度の歌には、「夢中会恋」という詞書が付けてある。

夢中逢恋といへる心を

うつつにはあふ夜もしらずみる夢をはかなしとてはたのみこそ

せめ(『新後撰集』恋歌二、後二条天皇)

うつつにはあはばかくこそと思ひねの夢はさめてもうれしかり 夢中逢恋といふことを

うつつにはしばし袖をもひきとめでさむる別ぞしたふかたなき けり(「風雅集」恋歌二、藤原為基 (「鴨長明集」 夢中会恋

として夢を頼みにしている。 これらの歌は、現実には会い難い恋人に夢で会い得たことを慰め また、このような「夢中」という詞書を持つ歌は釈教歌にもみ

> られる。 未得真覚、恒処夢中

らん(「隆信集」

むすびける夢ともしらぬながきよをけふききとくやさむるなる

ながきよのゆめのうちにもまちわびぬさむるならひのあか月の 未得真覚恒処夢中、故仏説為生死長夜のこころを

そら(「続古今集」、法印長忠) はれやらぬ心のやみのふかき世にまどろまでみる夢ぞかなしき 朱得真覚恒処夢中

識論に云く、いまだ真覚を得ざるときは、常に夢中に処る。 界をさす。詞書の経文の句は、『往生要集』の大文一の「故に唯 僧正範懲)や【風雅集』(26、覚胤法親王)にもみられ、「夢中」 とは法印長恵の歌に説明されているように、無明長夜の煩悩の世 このような詞眥を持つ釈教歌は他に、『続後拾遺集』(39)、 (【統千戒集】、法印实寿)

に ほのかに夢に見えたまふ」の後半の句について、馬場光子氏 「仏は常にいませども 現ならぬぞあはれなる 人の音せぬ晄 一方、この「夢中」という語は、「梁塵秘抄」の今様の法文歌、 仏説いて、生死の長夜となしたまへり。と。」によっている。

において之を見るなり』(『般舟三味経』)の、修行の果ての忘我 が、「『一心に念ずること若しや一昼一夜、若しくは七日七夜すれ ば、七日を過ぎて以後、阿弥陀仏を見る。覚において見ず。夢中

8

の境に阿弥陀仏を見るという趣旨を生かして、阿弥陀仏を釈迦に 中に示現するという場合にも用いられた。 援用したものである。」と述べておられる ように、仏が人の夢の(itel)

さらにこの「夢中」という語は、『文華秀麗集』に、「晩に江

爺」)と用いられており、経文や漢詩の中で多用されている。 村に到り枕を高くして臥す「夢中遙かに聴く夜半の鐘」(「山寺の 忠度の歌の詞眥の「夢中」も、恋人との逢瀬を持つ夢の世界を

表し、この歌は現実には会い得ずはかない夢の中で会えることに

限りない喜びを感じ取っている。

風のおとに秋の夜ぶかくねざめして見はてぬ夢のなごりをぞお 閨冷夢鶩といふことを、人にかはりて

(「忠度集」雑、 81

帝の夢のお告げによって明石の浦を去って未来を切り開いていく

忠度の夢の歌は恋に関するものが多い。そして、源氏が父桐壺

見ていた夢を名残惜しく思っているというもので、は、〇、m、 歌の例としてあげられている。この歌の意味は、秋の夜長も更け た頃風の音にふと目が覚めて、最後まで見終わっていない今まで けれど、たゞ詞続きにほひ深くいひなしつれば、よろしく聞ゆ」 この歌は、『無名抄』の「故実の躰といふ事」の「させる事な

「見はてぬ夢」という歌語は、前掲の**『古今集』の忠岑の**「い mの音を繰り返して、優美なリズム感を生み出している。

特に、81番の歌が『無名抄』にとられていることは、忠度の歌

のちにもまさりて」の歌に詠まれており、 よそながら思ひしよりも夏の夜の見はてぬ夢ぞはかなかりける (『後撰集』夏、よみ人しらず) 八代集では他に、

なくしかの声にめざめてしのぶかなみはてぬ夢の秋の思ひを

露はらふねざめは秋のむかしにて見はてぬ夢にのこる面かげ (『新古今集』秋歌下、慈円)

なく感じながら、その夢への愛着が断ち切れないでい

などがある。これらの歌は、ふと夢が途切れて一層その夢をはか

(「纟」恋歌四、俊成女)

なお夢の中にいることを求める、夢へ傾斜した気分を詠んでいる。 忠度の歌も、風の音によって夢から現実へ引き戻されながらも

いった恋愛に関する歌語が効果的に使われている。 の歌の「思ひねの夢路」や、 いった、夢の持つ雰囲気や情調を重視している。そこには、64番 を越えた夢幻的な気分や恍惚感、夢から覚めた後に残る余情と ることは、直接には取り上げられていない。むしろ、現実の世界 (『源氏物語』明石の巻)といったような、夢の持つ霊力を信ず 77番、81番の歌の「夢のなごり」と

の平明率直な歌いぶりの中に余情を感じさせる点が、鴨長明に高 く評価されたものと言えよう。

注

2 1 藤井高尚著 本居宣長著

3 **建田空秘署**

4

『中世の精神世界 死と救済』

5 6 「鬧―幻想領域の始源」(『国語国文』昭和51年9月号) 『古代和歌と祝祭』所収「闇のうつつ― ―|緑語の構図-

7

北村季吟茗

10 9 8 諸栃轍次著 江戸時代の注釈母。 |古今集以前| **省者未祥**。

13 12 11 において---|国語国文|| 48巻5号「「忠度百首」小考――「堀河百首」との関連 **【私家集の研究】所収「【忠度集】に関する覚書」** 「新釈漢文大系白氏文集」

「日本思想大系 源信」所収「往生要集」 **【日本古典文学大系文華秀麗集】** 『国文学解釈と鑑賞』 一九九六年十二月号所収「梁廛秘抄と法華経」

(せら

もとき 県立笠岡高校教諭)

15

14

「敬枕歌ことば辞典」

17 16

> 研究室受贈図書雑誌目録 (平成九年一月~十二月)

単行本

大森篤子作品集(I)シングルマザー(大森篤子)

者木部暢子) に関する研究」研究成果報告書(鹿児鳥大学法文学部 「鹿児島市とその周辺地域における地域共通語の実態とその教育 研究代表

共同研究【源氏物語】とその比較文学的考察(共立女子大学総合 究成果報告書(上越教育大学言語系教育研究系国語コース) コミュニケーション能力の育成

平成八年度教育研究特別経費研

教育実践場面分析演習「国語」の研究Ⅱ 音声言語教育における

文化研究所神田分室)

源氏物語研究 魂と言葉の目覚め(東京女子大学日本文学科

本盛子)

平家物語の成立(栃木孝雄編)

95広島女学院大学公開講座論集

日本語の世界(広島女学院大

雑誌・紀要

愛知教育大学大学院国語研究 (愛知教育大学大学院国語教育專

攻 三、四、五

10

松